

季能古博物館だより

行 庫 館
 文 庫 館
 陽 文 庫
 人 博 物 館
 財 法 人 能 古 博 物 館
 〒819 福岡市西区
 能古522-2
 ☎(092)883-2881・2887



真翁銅像ものがたり

明治の少年
 ・大器緒方竹虎
 ・丁稚奉公

真藤翁喜寿像（桜の木の下で）

能古博物館の本館は、少々小高い位置にある。南面の視界は博多湾を眼下に、糸島、早良、筑紫、粕屋四郡の連山と福博の町まで見渡せる。

館前庭に、小銅像が立つ。赤御影の棹台石で大人の背高に揃う。像正面の台座縁に『真藤慎太郎翁喜寿像』、左側に『1959、津上

昌平作』とある。

この寿像は、昭和34年、真藤先生七十七歳、即ち喜寿の祝いに日本水産会から贈呈されたものと聞く。

真藤翁の生前を知る人は、生き写し」と語り、「ようでけと」と語って、つくづく翁の人柄をしのばれる様子がかがえる方がある。

羽織、袴に白足袋は、翁外出の普段にされる姿である。像には、羽織の縫い紋まで鮮やかに見える。

この立派な像（丈70センチ）が、能古博物館に立つ由来は、博物館の設立は財団法人亀陽文庫で、その創始者が翁である。寿像は、当初、東京千代田区霞ヶ関の真藤邸に、先生御死去（昭和四十六年一月）の後は、後嗣の真藤辰五郎（映画俳優・進藤英太郎）氏の横浜邸に移された。後に亀陽文庫の設立を聞かれた英太郎さんから翁寿像を福岡に移してはどうか、と話されたことがある。昭和五十二年英太郎さん御死去。その後、御息女の真藤嘉世子さんから、父も言っておりましたので、となって現立地を得た次第である。

さて、翁寿像には、生前御知己の方々が段々に少なく、どういう方ですか、と話しを求められることも多いので、この際に先生の略歴を記述

しておくことにする。

幸いに、先生八十歳の祝賀会が昭和三十九年一月、福岡の諸有志によって企画されるに際し、先生の波瀾万丈、小説以上の人生絵巻を聞き書きにしよう、と、提案された。

先生は、過去を得々と、また自慢話など己れを語られない方である。案の定、固辞された。そこで、手を換えて、先生お気に入りの若い人達が、ねばった甲斐があり、「考えてみる」と、なった。

一旦、帰京されて、いろんな資料と写真など、用意されたようである。拝見して驚いたことは、歴史的な写真とされ、これだけで物語りになるといえるものもある。以後、聞き書きは急調子で進んだが、これはなにより先生の御記憶の良いことによる。先生にも、意気込みが見えて、聞き手が追われるようになった。

結局、先生の前半生というか、大正まで進んで、もうこのへんでよろうと打ち切れ、以後は年譜的なまとめにすることになった。

祝賀会には、右の聞き書き原稿が半分程度に抄出され、立派な装幀の和本冊に仕上がりが、祝賀会記念品の一つとして御出席各位に贈呈されたのであるが、この時の原稿が文庫に

残っていた。

以下は、この原稿による「真翁聞きがき」である。従って、先生はぼく、として登場されることになる。

☆ ☆

ぼくは、明治十六年七月、福岡市紺屋町(中央区大名1丁目)、父利吉、母ナツの長男に生れた。姉三人の次に、ぼく以下第二人の六人姉弟である。父の身長五尺八寸(1・76m)、当時としては大男。姉も自分たちみんなが父親に似て大柄、ぼくは子供相撲によく出された。

数え年八歳、当時の学制は簡易小学科(一年)、尋常小学科(四年)、高等小学科(四年)で、ぼくは大名尋常小学校に入学。校舎は、赤坂濠端で西隣に修猷館中学校があった。

明治廿七年大名小学校を卒業、西公園の西麓、福岡師範学校付属小学校高等科に入学した。付属小の場所は、現在と同じ。当時の町名は荒戸五番丁、ただ現在の通路を挟んだ運動場はなかった。まだ近辺みな、長屋門と瓦葺土塀の旧武家屋敷ばかりで、校門のすぐ前が、昔の御典医篠田家、同家から西に黒門川寄りの角屋敷が祝原氏、これは、ぼくと同級生がいたので帰りに寄ったことがありよく覚えていた。四番丁に毛屋の

屋敷があり、これにも同級がいた。

高等科に進むと、服装が尋常時代の筒袖着物だけから、必ず袴をはくので大いに風儀がととのって、みんな一寸偉くなったような気がした。

付属時代に、緒方竹虎とその西兄の雄平、大象、それに中野正剛がそれぞれ学年違いがあるが一緒になつたことがある。

ぼくは明治十六年七月、竹虎は廿一年一月、数え年では五歳違いであるが、三月を区切りに早生れ、遅生れで学年合が前後するので、竹虎とは四学年差があったが、竹虎は成績抜群、小学校で学年飛び越し進級となり、これに学期中に上級編入があつて、ぼくと一学年差になつていた。

緒方三兄弟は、学業優秀だけでなく揃って温厚君子型で、少年仲間にも敬意を持たれていた。ただ、ぼくと竹虎はウマが合い、登下校を一緒に歩いた。当時、天神にもう一つ高等小学校があり、これに博多方面はもろろん、福岡市の今川、西町、地行、唐人町あたりからの通学も多かった。これと、ぼくらの大名町、柳原、赤坂から西の付属小高等科に通学する生徒とは、途中で顔を合わすことになる。両校とも、小グループになつて通学しているの、だんだんと意

識して、一寸肩を張った恰好をする者もある。その中で大将株のような者が目立ってくる。

当時、道幅も狭く、東西の道は下の橋、上の橋の濠端道といま一つは六町筋(いまの昭和通りで西の黒門川から唐人町、すの子町、本町、呉服町、下名島、上名島町の六町を抜けるのでこの名があつた。いまの南側歩道に商家が向いあつていた。これは福岡城下を抜ける唐津街道でもある。)の二道以外にない。そのため両校の通学連中は、どちらかの道でスレ違ふ。唐人町の風呂屋の子供で井手六三郎というのが、西の方から天神の高等小学校に通学する大将株。先方も、ぼくに目をつけていることがわかる。ついに或る日、双方の仲間が見守る中で、お互い下駄を脱いだ。一騎討ちである。ぼくは習い覚えの柔道であるが、背負い投げをかけて巧くきまつた。しかし敵も巧者で、すぐ立ち上がると、組み合つたままの姿勢になつた。向うの連中は、井手に声援をしながら場動的な動きを見せ、仲々馴れた仕草である。それまで、緒方は、ぼくの下駄を隅によせて、これに腰をおろし悠然と両手を組んで状況を見ていたが、つかつかと前に出て、組み合い両者の

肩に手をかけ「ヨシ、これまで！」と、さながら相撲に行司が水をいれる調子である。その上で相手の全員に「もうよかろう。これから仲良くしようや」と声をかけ、これで納まりがついた。

翌日から顔を合わせると、ヤア、オウと声をかけあう仲になつた。

ぼくも、緒方の采配には文句なく感心、いまに亡き緒方をしのぶことの一つである。

ぼくが当時、通つた柔道々場は西職人町(現、舞鶴2丁目)進藤喜平太先生の屋敷前にあつた明道館(玄洋社内)、師範は竹田乙鷹、また葉院新川に自剛天真流道場があり、師範は松井幸吉と言ひ八百屋さんであつたが、この人も仲々強い先生であつた。この先生の弟(松井百太郎)は後に警視庁柔道教師、自道場を東京赤坂福吉町に構えられた。

明道館時代の同門に、安川第五郎土屋直幹(正興電機創立者)がある。

明治廿七年八月、日清戦争始まる。子供心に心配で、お宮の前を通ると必ず拝礼して戦勝を祈願した。

戦勝講和は、大いに嬉しかったがその直後の露独仏による三国干渉による屈辱は、悲憤限りなかった。

これが大いに動機となつて、ぼく

能古博物館だより

の露西亜行が実現することになる。付属校時代に一番感化を受けたのは柴田文城先生である。先生は、西区橋本にお住まいで、乗馬で登校されていたが、馬上の先生を見ては、己れの誇りのような気分になったものだ。

三十一年、付属小学校高等科を卒業すると、大阪の叔父から上阪し中ノ島商業学校に入學して、叔父の店を手伝えと、父も勤めるので、生来はじめての旅行に出た。未だ鉄道が全線開通しておらず、博多から三三三位の汽船に乗った。

目的通り、商業学校に入ったが、案外に叔父の目算が別にあつたのと、これが気に入らず、その年の暮れに帰国した。翌年、呉服町の山崎甚吉商店(砂糖卸、小売商)に住み込み奉公したが、ここでは大いに働いて商売のコツを覚えた。当時の砂糖はすべて樽詰めで、木樽入りの内側を「かねべら」でこしこしとこさぐ。木屑のまじつた砂糖を集め、さらに空樽に水を入れた後、しばらく置く。その上で中の水を丹念にかき回し、その水を大きな鉄釜に移し取って煮つめる。こうして拾い砂糖や、どろどろに濁った汁は、よくし

たもので「つくだ煮屋」とか「ぜんざい屋」に結構よく売れた。また黒砂糖、中白、三盆といった幾種類もの砂糖樽を車力に積んで博多各町から福岡の方は唐人町、西町、今川橋にかけて八百屋、食料品店に卸し売りに行かせられた。砂糖は重い。

車力に三樽ぐらい積んで唐人町からヤナ橋を過ぎ西町にかかる旧道を鳥飼神社の南正面にかかる坂道は、年

並み以上に体力があつたばかりにも大いに難儀であつた。お宮を過ぎて大通寺前までくると冬でも汗ビツシヨリ、まずこのへんで一息入るのが習慣であつた。大通寺の息子、増永信吉は、多くの付属時代同級生だがこの頃は上京していなかつた。しかし、後日に彼とは面白い機縁になる。年の暮には掛売りの集金に出るが、この頃の通貨はほとんどが銅貨で、中には銀貨、札(紙幣)をかうことも



真藤翁寿喜像からの眺望

あるがこれは至って少ない。まだ寛永通宝が、一厘代用で使われていた時代。この集金で帰りに信玄袋が一杯になり、腰に帳面、肩に銭が入った袋を担い、大店の丁稚兄イの恰好である。集金は、重サで七、八貫

(三〇キロ)はあつたと思う。この奉公は二年余でやめた。それは前に話した大通寺の増永信吉に会つたことから、彼の話で上京を決意したことによる。

少々の貯金、それに俄か仕度で笹崎八幡放生会の晩に出発した。

東京(新橋駅)には増永信吉が約束通り待っていた。増永の間借りに同居して見ると、お

どろいたことには彼は学校にも行かず、職にもついていない。ぼくの所持金もたいしたものではなく、間もなく二人とも生活に窮してしまつた。なんでも彼は、親もとは、坊さん学校に通つてい

が、給費制の学校を飛び出しており、つまりは坊主になるのがいやで思案中らしく、ぼくと一緒に成つて、方向を決めようと思つたと言うのである。結局、増永の発案で、彼の寺(福岡大通寺)で以前に小僧をして

いたのが、今では郷里の会津若松の由緒ある寺(大法寺)の住職になつており、これを頼つて行こうということになつた。ぼくもいまさら福岡に帰りたくないし、どうせのことに他国の風に吹かれ将来を考えようと

思い、増永の案に同意した。ところがこれも大当りはづれ、行つて見ると、話しによる名刺が粗末な小庵である。なんでも以前は、住職のほかに坊主、小僧五、六人もおる地方の大寺であつたが、結局は明治前の戊辰戦争で幕府方として、よく戦つた会津藩攻防の戦火に焼け、壇家の多くが同藩旧士族であるため復興どころか、その日の暮しも立ちかねる状態であることがわかつた。住職の言いわけに大いに同情、雑炊をよばれながら、ぼくは単身退去することにした。増永は、東京を出るときから脚気の気味で足も腫れて青白い顔をしており、彼だけは暫く滞在することに成つた。(以下次号)

早良郡惣社飯盛神社

(さわらぐんそうしゃ
いいもりじんじや)

佐々木 哲 哉

飯盛神社は福岡市西区飯盛(旧筑前国早良郡飯盛村)、早良平野の中央部を南北に貫流する室見川中流域の西側で、なだらかな円錐形状の山容を見せる飯盛山の麓にある。旧社格は郷社。社伝によれば、文徳天皇の勅願により、貞観元年(八五九)社殿を建立、和氣清友を勅使として下向させたとあり、広永年間(一一三九)に百町の神田があったとされている。

青柳種信の『筑前国統風土記拾遺』には、「当郡(早良郡)の惣社にして、七村(飯盛、吉武、金武、羽根戸の産神也)所祭神三座、伊弉册尊、左は宝満神、右は八幡大神なり、いにしへは上宮・中宮・下宮有、因て後世に三所権現といふ」とあり、神社書上記等にも「早良郡宗廟」とみえる。飯盛神社の社領は、文永八年(一一七一)の社領坪付に惣田数七十三町二段二杖とあり、社伝の百町には誇張があるにしても、地方の神社としてはかなりの規模であったことが知れる。しかも、その社領の範囲と、広永四年

(一一三九)の「飯盛宮行事役屋敷注文案」に示された祭事に携わる各村行事役の分布を併せると、その勢力範囲が、ほぼ早良平野の中央部全域に及んでいたことがうかがわれ、文字通り「早良郡惣社」であった可能性が高いということになる。

このことは、飯盛山の名、およびこの山容から推してもうかがわれることで、古い時代から、この山が早良平野一円に住む人びとの信仰対象として仰ぎ見られていたのではないかとこの想像も成り立つ。柳田国男は、しばしば、飯盛山の名をもつ山が全国には百以上もあり、そのいずれもが形の整った孤峰であることを指して、普通その意味付けとして語られている。山容が飯を盛り上げた形に似ているからそう名付けられたというだけでは片付けられない、もっと深い信仰重要要素がその中に含まれているのではないかと、示唆に富む見解を示している。周囲の地域から望み見られる、小高く、こんもりした場所には、神霊が天下り鎮まります

というのが古代人の信仰感覚で、そうした場所を飯盛山とか飯盛塚(飯塚)、茶臼山・茶臼嶽などと呼んだのではないかというのである。それは、見るからに崇高な山容がもたらす印象と、飯をもる器や臼・ひさご・榊など、内部が中空になっているものを魂袋(たまぶくろ)―神霊の籠る器)とする古くからの信仰感覚との結合の中から生じた発想とも受け取れる。

早良郡飯盛山もまさしく形の整った孤峰で、地元では飯を盛った形に似ているからそう名付けられたと説明されている。全国共通の意味付けで、それはとりもなおさず、この地域一帯に住む人びとが、古い時代、この山に神霊の降下を想定していたことを暗示している。それを裏付けるかのように、山頂からは永久二年(一一一四)銘の瓦経が出土しており、しかも、結縁衆の名が刻まれている中には、早良郡司壬生信道の名も見える。

神体山という原初的な信仰感覚、上・中・下宮という三社構成をとっていた神社規模、古代末期における郡司の崇敬、中世における信仰圏の広がり、そのいずれれをとってみても、その中に早良郡惣社飯盛神社のゆる

ぎない存在がうかがわれる。

中世の飯盛神社は、鎌倉期の記録によれば、三所権現の他に六カ所の末社と三カ寺の神宮寺を擁し、多数の神職・社僧がいて、神事と仏事が並行して営まれるという完全な神仏混淆の形態がとられていたことがうかがわれる。それが、南北朝と室町末期の二度にわたる戦乱によって社運の衰退を見たことは、この地方における他の神社の例に洩れない。

『筑前国統風土記拾遺』には、南北朝期、太宰少貳旗下の将士によって山頂に山城が設けられたために、戦火を蒙って上宮が破却され、中宮に妙見を祀るようになって三社構成が崩れ、さらに室町期には大内氏の支配下に入って、度々の戦乱に社領も半減して社殿の修復さえままならなくなり、神職・社僧の離散によって年間二十六度を数えていた仏・神事もきわめて限られたものだけになったことが記されている。

この時点で、かつて早良郡一円に広がっていた飯盛神社の信仰圏が前記の七カ村に縮少され、神宮寺も一カ寺を残すのみとなり、年間祭祀も月例の祓行事のほかは、粥占を含む年頭の神事と九月の大祭だけが、僅かに残った神職と社僧の二人によつ

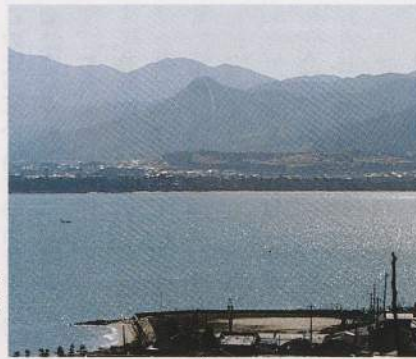
能古博物館だより

て営まれるという簡略なものになっ
ていた。そうした中で、毎年正月十
四・十五兩日から二月朔日にかけて
行われていた粥占の神事は、江戸期
を通じて継続され、現在も殆どその
形を崩さずに受け継がれている。そ
こで、以下、消滅をまぬがれた唯一
の伝承とも言えるこの粥占の神事に
ついて概要を述べ、かつての早良郡
惣社飯盛神社の性格と地域信仰との
関わりを探る手がかりとしたい。

粥占は年初めの卜占神事で、飯盛
神社のほか、佐賀県三根郡千栗八幡
宮、福岡市油山の正覚寺・海神社、
筑紫野市筑紫神社等、いずれも地域
の古社に伝承されているが、小正月
の朝神前に供えた粥を翌月の朔日ま
たは十五日に下ろして、かびの生え
具合によりその年の吉凶を占うもの
である。

飯盛神社の粥占は、現在陽曆に移
行して二月十四日夜から十五日早朝
にかけて粥炊き・粥供え、三月朔日
に粥開きが行われているが、その奉
仕は大内姓二軒、青柳姓二軒の「粥
元」と呼ばれる家筋が世襲制をとっ
て勤めてきた。神事は十四日の昼に
「穂垂れ菜御供」の祭典があり、夜
に入って粥炊きとなる。「穂垂れ菜
御供」は神前に供物を供えて稲の穂

の垂れる(豊作)のを祈願する予祝
儀礼で、粥炊きに先だって行われる
粥嘗の神事と共に、粥供えの前段を
なすものである。粥嘗は粥の調製に
用いる米・小豆・塩(粥米は青柳本
家から供進)に神酒とヌタエを添え
て神前に供え、撤饌のあと神職と
粥元の間でヌタエを取着に神酒がく
み交わされる。神意を尋ねるにあたっ



飯盛山

て神との間に交わされる相嘗である
が、この時の盃に志賀島の漁民から
奉納される鮑貝が用いられることは
注目に値する。粥炊きは午後九時過
ぎ、粥調仕所で行われる。神前に供
えられた米二升・小豆一合・塩少量
を大釜に移し、手桶三杯の水を入れ
て、神職が竈敷いをしたのち神殿か
ら持参した浄火を木の小枝に点火、

炊き始めの太鼓が打たれる。粥元は
二人ずつが交代で火の調節(弱火)
と粥まぜをする。粥まぜは大杓子で
間断なく、粥が餅状になるまで掻き
まぜ、翌朝午前一時過ぎに太鼓の合
図で炊き上げとなる。大釜に蓋をし
て粥元は一旦帰宅し、午前六時に再
び参集して粥盛りをする。神事のあ
と、釜から手桶に移した粥を、拜殿
で三つの金鉢に盛り分け、早田・中
田・晩田と墨書をした箱に収めて神
殿の奥に供え、粥供えの行事を終わ
る。

粥開きはそれから半月後の三月朔
日(もとは旧二月朔日)の早朝に行
われる。拜殿で粥開きの神事が行わ
れたあと、神殿に供えられていた粥
鉢が下ろされ、粥元がそれを取り囲
んで蠟燭の火でかびの生え具合を検
分する。判定は、早田・中田・晩田
の別に、かびの長さや色合いで、毛
付き・稔り・水・風・虫の状態を、
粥元が合議の上で決定する。判定は
その場で紙に書かれて拜殿の前に掲
示され、夜明けとともに訪れてくる
参詣者にその年の粥占いの結果が知
らされる。

以上が現在行われている粥占神事
の概要であるが、本来は小正月の粥
供えであったものに、民間における

豊作祈願の予祝・卜占的要素を取り
入れて儀礼化し、しかも氏子の奉仕
によってそれが営まれてきたところ
に、飯盛神社の古くからの地域農耕
守護神としての性格が端的に現われ
ている。また、宮司家に伝わる明和
三年(一七六六)の「飯盛宮大宮司
牛尾家年中行事帳」には、粥開きに
産子七カ村の庄屋が同席しているの
が見られるが、中世における各村行
事役の関与を引き継いだもので、お
そらくはもっと古い時代、この祭り
に早良郡一円の村々を対象とした、
豊作の豊穰を祈念する「としごいの
まつり」としての性格があったもの
と思われる。「牛尾家年中行事帳」
には、このあと收穫感謝の「にい
なめのまつり」にあたる九月九日の大
祭に、「先産子七カ村分七神楽ヲ上
ケ其上ニテ御郡中四十八カ村之神楽
ヲ上ル」とあって、早良郡惣社であっ
た時代の神事の名残りが留められて
いる。

(註)
結縁④衆生が得道、成仏のため縁を
仏法僧の三寶に結ぶこと。又、仏菩薩が
世を救わんがために、まず衆生に關係を
つけること。
撤饌⑤神にそなえた物をさげる。

幼童の教育
 閨秀 亀井少槩伝 (三) 庄野寿人

幼童の教育

明けて享和二年、少槩五才。

この年、八月二十五日は、祖父南冥の還暦(六十才)に当る。南冥は、少槩誕生前の寛政四年、己れの心血を注ぐようにしていた福岡藩西学問所(甘棠館)の総受持兼教授を罷免され、終身蟄居(在宅抱禁、他出および訪問者との面接、文通一切を制禁)の処分を受けていた。これは、徳川幕府が直轄する学問所(昌平校)の朱子学授業の不振と学生の減少が見られるのに対し、その原因を陽明学、古学派の台頭にあるとし、これらを異学と断定して排除する措置(寛政異学の禁と呼ぶ)を取った。

能古博物館だより

これに便乗した福岡藩東学問所(修猷館)朱子学派は、幕府措置に藩当局の同調を迫って南冥排斥を策したとされる。以来、すでに十年余を経て、なお南冥に寛典の兆しは見られなかった。

このために、昭陽は父南冥の還暦祝いには慎重を期す必要があった。昭陽は、多勢の招待客で盛大にな

ニ之ヲ記ス、(淡窓著「懐旧楼筆記」)

右の淡窓記事中の招客順氏名につづく昭陽以下の大壮、大年は、南冥三子で祝い客ではない。一応、席順の末席に整列しているが、開宴に先き立ち、昭陽が亀井家当主として、招待客五人に父還暦に出席を得た謝意と挨拶を述べる。後は招客に対坐する位置に兄弟それぞれに進み、接待に努めたと想定される。

こうして六日間に分けた小宴会の模様を右の淡窓記事で読み取れるのであるが、この程度の招宴であれば六百坪をこえる亀井家の屋敷地、川べりと海浜の松原を周囲にした地形から外部の注目をひくことはなかったと考えられる。

それにしても、全国に知られた南冥の還暦祝賀としては、つましく、昭陽の苦心がよくうかがえる。また、この寿宴に南冥が記念揮毫した「君子万年永錫祚胤」の楷書一行は、よく見ると心なしか寂しさを感ずるが、書の句意は「有徳の君子に、天は万年の寿を与え、後胤の子孫に至るまで幸多きを及ぼす」とするもので、南冥は自らの境遇から、子孫のため切に祈ってやまなかった言葉であると察せられる。

南冥は常に「書は君子の顔、文は人なり」と教え、亀門に学ぶ者ひとしく書と詩文を心がけ、亀門一流の書、詩文また良し、とされる者を多く世に出した。

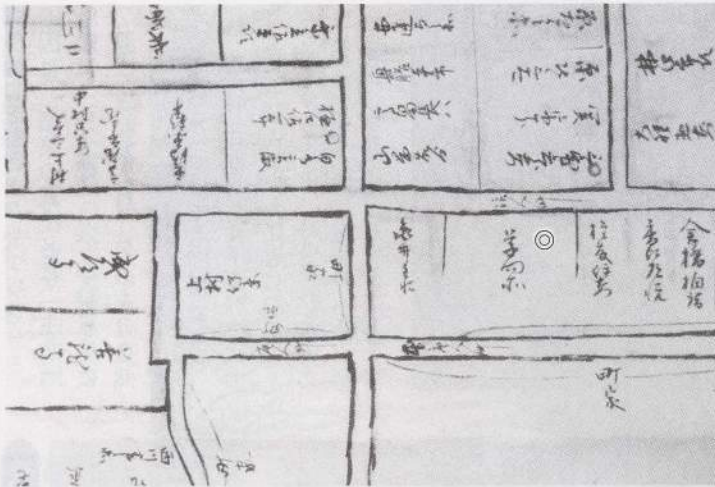
少槩も、書、詩文の素地は着実に学んでいるが、祖父南冥が赤頭巾をかぶり、赤い十徳羽織を着用した六日間の姿を幼い眼に残したと思うのである。

享和三年、少槩六才となる。四才から父昭陽直きに習字を仕込まれ、習字と一緒に一字一句の訓みも教わった。

こうした成果は、早やくも「孝経」一冊二、五八三文字の素読を美事にした。

孝経は、儒学初等の書物で、これを終えたと「論語」に進む。少槩は、こうした自分の修業進度に合わせて、後年養嗣子「永之進」(弟陽洲の二男)に同様の勉強をさせているが、すべて自らの体験によった教育法として自信によるものであった。これは、後に詳しく述べる。

ここで当時の幼童勉強を少しく述べると、漢学塾の習字は、漢字に始まり仮名は一切しない。仮名は何時とはなしに自分で覚えるものとされた。



◎印 福岡藩西学問所「甘菜館」左隣が亀井主水（亀井屋敷・私塾）

農町家の子どもは、六才頃から寺子屋に通い、平仮名の手習い（習字のこと）から始まる。とくに女子の場合は、平仮名だけで終ることが多い。これらも町中か、農村では庄屋か村役を勤める農家の子女に限ることである。

さて、父の昭陽は五年前の大火後に藩学問所（甘菜館）の廃校によって教職と藩儒（藩に漢学者として仕

える武士をいう）を解かれ、平士（一般の武士のこと）に替えられ、下級士で編成される城代組に組み込まれていた。城代組は、上級の馬廻組、次の無足組士が、用人、目付、郡奉行、町奉行、代官、番頭等の重要職に就くの比べ、その下役となり、城内見廻りの番、郡方などの下級職を勤める。この五年、昭陽にこれらの勤務が当てられなかったのは、藩が私塾を続ける亀井家に特別の配慮をしたものではなかった。このため此の年、昭陽に福岡城内の見廻わりと城門番が割り当てられた。この

役目は、同組内の相役数名と組んで、足輕、小者を従えて昼夜一日（相役と交替で詰所で仮眠できる）城内巡視と城門警固に当る。このため城門出入者の吟味、時には不審者の検束をすることもある。勤番の翌日と翌々日は非番休みとなるので、三日に一日の勤務である。役料として年米八俵が加給される。昭陽の本扶持給は、十五人扶持（年米

七十五俵支給）であるから役料を加え八十三俵となる。この役料があるため、本来の扶持給が少ない組士は、勤番加給を得るため就役を望む者が少なくなかった。しかし、すべて組支配で決定されることで、勝手な役替りは出来ない。昭陽の場合は、好んで就役するものではなかった。この年の暮、少梨に二番目の妹が生まれたが、不幸にして七日でこの世を去った。亀井家譜に「妙露童女卒。十二月廿四日、生七日而死一此の世の名字を得ないままに、妙露の忌み名で、生七日にして死す、と。昭陽の書き込みが見られる。

享和四年、少梨七才。

妹の敬も五才。すでに乳母離れしておるので、少梨は姉さんぶりよろしく、妹を連れて春先の樋井川に注ぐ細流に「せり菜」を摘みながら「しじみ貝」を見つけ、海辺に出て干潮を見ると「はまぐり、あさり貝」を、また松原では「松露、ぼうふ」を、塾生たちに混じって採ったに違いない。百道松原は、とくに「松露」の多産で知られ、これらは亀井塾の書生たちの自炊に、貴重な副食、天与の幸とされていた。

この頃になると、少梨の勉学は「孝経」を卒えて、「論語」の素読に

も調子加わり、また「詩経」をめくるまでになっている。

二月十一日、改元されて文化元年にかわる。以後の改元、文政、天保を加えた三元号通算四十年を化政天保の時代と呼ぶ。江戸中期の元禄、享保の四十年にひとしく、学術文芸の華開く様相を呈した時代の幕明けであった。

化政天保の時世は、江戸期最後の泰平であり、その後は幕末激動の時代になる。なお、父昭陽の城内番はつづいている。

文化二年、少梨八才になる。

父昭陽の城代組士としての勤役も満二年となり、交替の時期である。組頭から再勤を要請されたが固辞して承認を得た。昭陽は、塾生指導と城代組士として勤役を果す中に著述にも努めている。この五年に脱稿した書名は、古序翼、字例述志七卷、尚書考三冊、剥孟子、五子文評、蛾子となる。

さて、この年の特記事項は、亀井家と昭陽待望の男子、九月十六日の出生である。幼名を聞可、通称は義一郎。この通称名を以て「福岡藩諸士系譜・亀井家」の項に登載され、これが正式の武士名となる。義一郎は、後に蓬洲と号するが、この号は

藩士籍に記録されない。

因ちなに、南冥の武士名は「主水もんど」、昭陽は「豆太郎」で、少槲は単に「女子」と記録され、名の友は全然記入されない。これは、藩重臣、家老級の女子についても同様である。江戸時代、こうした女子差別は武士社会にも及んでいたことになる。

(付記) 参考までに、右の実例を亀陽文庫収載の「諸士系譜」で供覧にします。供覧御希望は米館の節、お申し出下さい。



百道松原移転後亀井屋敷および亀井塾図

展示品紹介



中西耕石
溪山雪霽
(128.5×41)

吉嗣拜山
静境結廬画
(141.5×43)

吉嗣拜山
色彩芦雁之図
(132×42)



吉嗣鼓山
淡彩山水図
(139×43)

二川玉篠
彩色桜花図
父相近題書
(105.5×23.5)

二川相近
水墨桜花夜景図
(97×30.5)

今季は、筑前文人画を師弟、親子という関係で、第2展示室に並べました。

◎師 中西耕石 自題画「溪山雪霽」
文字通り、山峡の雪景。霽は晴れとも訓む。夜来の降雪が全くやみ、積雪輝やきを見せ神気の清浄境である。早や地下に春の温もりが感じられ、山居を訪わんとした苦船の文人も見える。

耕石は、遠賀郡芦屋に生れ、早く京に上り四條派を学ぶ。後に南画に転じ、京都に南画院を開き子弟を教えた。

太宰府、吉嗣拜山は高弟の一人。

耕石は、南画の必須要件である詩文の題書は得意でなく、簡題にとどめたが、絵は抜群とされる。これは本作にもうかがえる。耕石は文化四(1807)〜明治一七(1884)。本作は乙卯(安政二年)である。

◎弟子 吉嗣拜山 淡彩静境結廬画。
黙智翁拜山銘。右手の山崖上に翁媪喫茶の風情を添える。拜山は、日田広瀬門に

入り詩文を画は中西耕石に就き高弟とされる。拜山の詩題は師耕石にまざる。

本図は、大正二年66才の作、次の芦雁図は、拜山お得意の一作で明治四十四年作である。拜山は太宰府および天満宮のため、陰に陽に尽くした功労者である。

◎嗣子 吉嗣鼓山 淡彩山水図 自題

鼓山は、拜山の長男。主に山水図が多い。作品は父に比べて少ないようであるが、太宰府旧家に襖絵、床の天地袋に作品が見られたが、最近の建替えて失われている。父の作品に鑑定を求められた箱書き銘など見られる。

さて、三人の画作について言えば、さすがに師、父、子の序列通りとされ、耕石、拜山の題書詩文は断然拜山が勝るようである。

次に二川相近と娘玉篠の梅花図を掛けるが、ここにも父相近の上手、とくに水墨桜花夜景図は相近の清澄な人柄までうかがえるようである。

本号執筆者の紹介
佐々木哲哉氏

「早良郡惣社飯盛神社」
西南学院大学教授
庄野寿人氏

「真翁銅像ものがたり」
「閨秀 亀井少槲伝」(三)
当働亀陽文庫理事長

編集後記

連載「真翁銅像ものがたり」がスタートいたしました。当亀陽文庫の創設者である真藤慎太郎を、明治・大正・昭和の大物としてご記憶の方。一方、平成の年号にも馴染んだ今、彼が生きた時代は遠い昔という別世界のことのように感じられる方。様々な方々にご一読いただき、どのような感想を持たれたのでしょうか、お聞かせ願えればと思っております。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎ (092) 883-2881・2887
FAX (092) 883-2881